茅葺（かやぶき）の旧本堂

復刊99号

茅葺（かやぶき）屋根の旧本堂の写真がみつかった。昭和30年代前半と思われ、この後に屋根の茅を取り除いて、カラー鉄板に張り替えた。

開創以来700年の間に、2度の火災の記録がある。「1708（宝永5）年、勝手火焚き口より出火。本堂、庫裡（くり）、学問所等全山消失。」当時は四間四方の学問所もあったことがわかる。8年後に被災時の31世住職が再建した。しかし、その40年後の1756（宝暦6）年に再び焼けた。この時も8年後の1764（明和元）年に、33世住職が再建している。ともに江戸時代中期のこと。昔の寺は火を使う場が多い上に、茅と木材の燃えやすい素材だったから火災が多い。

写真は再々建後の本堂で、間口9間奥行7間の風格あるものだったが、度重なる災害のためか材料は良くなかった。その一部を再利用して、1981年（昭和56年）庫裡を客殿に、2001年（平成13年）現本堂に建替えた。史料から苦難の歴史が偲ばれる。

（石山与五右衛門氏撮影、斉藤文夫氏提供）

妙（たえ）の光（ひかり）

facebook 始めました

通巻118号　復刊99号　2017年7月1日（季刊）　角田山妙光寺　発行　〒953-0011 新潟市西蒲区角田浜1056 TEL 0256-77-2025

行事案内

関東地区お盆参り　7月中旬

関東地区の檀徒宅に、お知らせのうえでお盆のお参りに伺います。

お盆参り、施餓鬼法要

8月1日㈫

午前　6時～10時　墓前の読経受付
午前10時30分　安穏廟法要
同　11時　本堂で施餓鬼法要と新盆法要
昼　12時　おとき
午後　1時　法話

新盆法要

ご希望で8月1日㈫ か 6日㈰

新盆にあたる全ての精霊のお位牌を本堂に安置し、ご供養します。

関係のご家庭には直接お知らせしますので、ご参列ください。

檀徒以外の方の新盆供養もお受けします。お問合せ下さい。

お盆棚経

8月初旬～16日㈬

旧新潟市内、県内遠隔地は、連絡の上で8月初旬から。近郊のお宅は従来の日程で伺います。予定を知りたい方、お留守になる方は8月1日以降にお電話ください。

岩屋七面様祭礼

8月19日㈯

午前10時、本堂にて法要とお加持。岩屋に移動して法要。お昼にお赤飯のご供養があります。ご自由にお参りください。

万灯のあかり―妙光寺の送り盆

（第27回フェスティバル安穏））

8月26日㈯

どなたも参加いただけます。　詳細は別紙パンフレットをご覧ください。

秋季彼岸会法要

9月23日㈯ ㈷

午前10時30分　安穏廟法要
11時　本堂にて彼岸会 中日法要
昼　12時　おとき
午後　1時　住職法話

予約不要ですので、自由にお参りください。

月例信行会　毎月第一日曜日

午前7時～9時
予約不要
会費千円（当日賽銭箱にお願いします）

お参りと法話、軽い作務、朝粥の朝食やコーヒータイムもあります。

月例ボランテラ　毎月15日

午前9時～12時　　午後1時～3時
清掃作業等。
※8月のみ24日（木）に変更。（送り盆準備作業のため）
たくさんの皆さんのご協力をよろしくお願い致します。

お寺でヨガ　毎月第3木曜日

7月20日㈭　8月17日㈭　9月21日㈭　10月19日㈭
午後2時～3時15分
参加費　一回700円
持ち物　ヨガマット、もしくはバスタオル
講　師　ノリコさん

どなたでも参加できます。予約制ですので、その都度電話での連絡をお願いします。

あとがき

お寺は『法灯継承式』の準備で、例年以上に忙しい日々が続いています。新たな取り組み『浄土講座』も、大勢の方に参加していただきました。次はいよいよ『妙の光』100号特別号です。新住職の紹介も、少しずつしてまいります。どうぞ、お楽しみに!（新倉理恵子）

移ろう世の中で変らない心

小川英爾

昔の風景

先代住職の妻だった母が東京の品川区五反田から嫁いできた当時、寺に電気は通じていなかった。その母が肥え桶を天秤棒で担いでいる畑の脇で、遊んでいた幼いころの記憶がある。妙光寺にも、そんな時代があった。

あのころはまだ300年来の行事である4月の『ご判様』が一昼夜丸2日間続き、本堂は立錐の余地なく、境内も露店が立ち並び人で溢れかえった。お参りの人は冷え込む本堂で夜通しの説教を聞いた。しかし昭和の終わりころには参詣者も減った。近年は期間を1日に短縮して、かろうじて継続している。

毎年8月1日早朝のお盆参りには、本堂や客殿で墓参りを終えた家族が朝からそれぞれ円陣を組んで、持参の弁当を広げる光景があった。爺ちゃん婆ちゃんは昼前からお寺の法要に参列してお斎に着き、若い親子は海水浴に出かけて行った。お盆の墓参りは子ども時代の楽しい家族の一大行事だったと、懐かしそうに語る人はまだ多い。家族連れのお盆参りは今も続くが、賑わうのは墓地のみで本堂に往時の光景は見られない。

隣村『五か浜』

自動車道が作られて車なら5分で行ける隣村五か浜だが、昭和40年ころまで寺からは波をかぶるような磯づたいの小道を1時間歩いて行くしかなかった。

お盆の16日朝父親に起こされて5時前に寺を出る。8時過ぎには各家がご先祖様を送りに墓地へ行くから、それまでお盆棚にお経をあげて回る。13日夜から別の村々を回って疲れているので、小学生当時は辛かった。

ある秋、五か浜での法事に父に連れられて行った。夏と違い人気のまったくない砂浜の道は寂しかった。五か浜集落の背後の垂直に近い岩山で、紅葉の中を滝が流れ落ちている。時間が止まったような不思議な世界を見た思いがした。いま五か浜には何世帯が暮らすのかわからないが、最盛期に40軒いた檀徒は、いまは3軒になった。

移ろうものと残るもの

〝諸行無常〟「世の中は移ろいゆく」がお釈迦様のお言葉だが、近年その速度がとても速く感じられる。昔の光景を懐かしく思うのは加齢のせいだろうが、ほのぼのとした思い出が多いのは、物質的には恵まれなくとも幸せだったのだろう。

22歳で住職に就いて、旧い因習にほとほと困ったことも一度や二度ではない。一方でそんな時に救いの手を差し伸べて、優しくしてくれた人の顔が忘れられない。

世の中が豊かになって、交通や通信手段、買い物等々各段に便利になった。思えばそのころから行事に集まる人が減少し、活気が薄らいで味気なくなったような気がする。変化は致し方ないが、味わいを残しつつ新しいことへの対応も取り組んできたつもりだ。

この度懐かしい時代の記録写真集『昭和の記録・海の村山の村』（妙光寺でも購入可、2千円）が出版され評判を呼んでいる。消えゆく故郷の風景を撮り続けた斉藤文夫さんの写真は10万枚を超えるという。写真集のなかに昭和30年代の妙光寺の風景が何枚もあり、しばし感慨にふけった。

単なる郷愁ではなく、時代がいかに移ろい形は変っても、失ってはならない人の心を伝えていく寺でありたいと改めて思う。

（今年の送り盆では写真展示と斉藤さんの解説があります。）

信心

「家族そろって」

新潟市西蒲区巻乙

石田 定雄さん（66歳）
文子さん（61歳）
長男・輝如さん（29歳）

長い妙光寺との縁

石田家の歴史は古いが、途中で両養子が入るなどしてその系図ははっきりしない。義父の安平さんは生真面目な職人だった。勤務先を定年退職後は、囲炉裏に掛ける自在鍵を作り、お茶飲み場を兼ねた自宅工場に吊るして嬉しそうに眺めているような人だった。正月元旦の寺参りは親戚の内藤さんとともに、寝こむ年まで欠かさなかった。

義母のキヨさんは明るい人柄で信仰熱心。地元巻地区のお経の会である〝講〟に毎月参加し寺の行事にも足しげく通った。

２人の長男である定雄さんも、電気工事技師として真面目一方の仕事ぶりだった。また特殊な竹を山に求めて歩き、魚釣りの浮きを削り出しては人にあげるのが趣味だった。地区の妙光寺世話人の担当件数が多く「大変だから半分応援するよ」と自発的に申し出て、世話人補佐を引き受けてくださった。残念なことに、先ごろから体調を崩して、近所の方と交代されたが。

一家で子育て

この一家に嫁いできたのが文子さんだ。岩室で3人姉妹の次女に生まれた。美容師として新潟市内で働いていた27歳の時、紹介された5歳年上の定雄さんとの出会いが縁だった。近くの工場に職場を替えて、長女巴寿美さんと長男輝如さんが生まれ、義母のキヨさんに育児を頼んで働いた。昼休みに搾乳機を使って取り置いた母乳を、子供を背負ったキヨさんが文子さんの職場まで行って授乳した。小学校入学後は義父も加わり、一家で子育てをした。

後には義父母の介護で苦労もしたが、2人の支えがあったから今があると感謝している。

長男・輝如さん

輝如さんは工業高校から新潟大学に進み、建築を学んだ。卒業後は各地での「大工見習い」を経て工務店に就職。大工として朝から夜まで働き、1年半で現場監督を任せられるようになった。しかし過労から体調を崩し、自律神経失調症と診断されて自宅療養を余儀なくされた。

この時、文子さんの発案で気分転換も兼ねて妙光寺の身延山団体参拝に参加した。文子さんは義母から、一生に一度はお参りに行くように言われていたことを思いだしたのだ。七面山にも二人で登詣した。「不慣れな山道の参拝は厳しかったが、あの時のすがすがしい気持ちは忘れられない」と輝如さんは語る。

いま文子さんは義母の亡き後を引き継いで、毎月の〝講〟に欠かさず参加する。輝如さんは病気が回復して新潟市内の建築事務所に勤務。さらに今年2月難関と言われる1級建築士に合格した。4月からは専門学校の非常勤講師も勤め、将来は独立したいと考えている。

今年はお寺の当番

今年4月29日、妙光寺の『ご判様』は巻地区が当番だった。入院中の定雄さんに代わり、輝如さんが〝お札所〟の係を担当した。文子さんも親戚の内藤さんらと台所係となり「丸1日お寺で楽しくお手伝いができた」と喜んでいる。

今は定雄さんの1日も早い回復と、東京に嫁いだ長女の巴寿美さんに孫が生まれることをお仏壇にお参りする毎日だ。

鎌田記

掌を合わせ、心安らぐ場所を求めて

二〇一一年三月十一日の東日本大震災から、今年は七回忌を迎えました。新潟県内には福島県から避難してこられた方々が、今も大勢暮らしています。その中に、毎年三月十一日に妙光寺で慰霊祭をしている方がいます。原発事故の現実と、妙光寺との出会いをうかがいました。

渡辺光明さん（64歳）
新潟市西区在住。利恵子さんの夫。被災時は福島県楢葉町で農業をしていた。

渡辺利恵子さん（64歳） 光明さんの妻。

Q では、三月十一日のことを聞かせてください。

光明 私たちの家は、楢葉町の高台にあります。脱サラして実家で農業をしていました。畑が八千坪あって、本格的にやろうと機械などをそろえて、ちょうど1年経ったところでした。あの日は、友人と一緒に畑でゴボウの穴掘り――つまり耕していたところでした。そうしたらグラッときて、地面が波打ちましたね。ゴォーっと地面から音がして、これは全然違うな、と思いました。

利恵子 私は当時勤めていたんですが、あの日は休みをとって偶然家にいました。台所で夕飯の下ごしらえをしていたら、揺れて揺れて這って家の外に出ました。

光明 自宅の下の集落は、津波で全滅して亡くなった方も出ました。でも最初は避難するつもりはなくて、危ないから納屋で食事をしようか、と準備していたんですよ。

利恵子 夕方になって近所の方に、みんなが体育館に避難しているから行こうと言われました。それで長靴履きで軽トラックに乗って、何も持たずに体育館に行きました。一晩で帰るつもりだったんです。

Q そのときは、原発のことは考えていましたか？

利恵子 全然考えていませんでした。「絶対に安全だ」と言われていましたから。

＊福島県楢葉町…人口約7,400人。事故のあった福島第一原発から20㎞圏内にあるため、町全体が警戒区域となり全域避難。第二原発のある富岡町の南隣に位置する。全域避難した自治体として初めて2015年9月、避難指示が解除された。解除後、戻ってきた人は約1,500人、21%。

光明 最初は地震と津波からの避難だったんです。十一日の夜も、一晩中余震でかなり揺れていました。それが翌朝、第一原発は爆発したらしいというし、町がバスをいっぱい準備して避難してくださいということになりました。それで私たちも軽トラックで、町のバスといっしょに南のいわき市に避難しました。大変な渋滞でした。

利恵子 その後、息子がインターネットで調べては電話をくれて「新潟県が一番受け入れ体制が整っている。日本海側が安全なんじゃないか」というので、新潟に向かいました。

光明 途中で2千円分ガソリンを入れて、吹雪の中を高速は使えないので細い道を通って、会津から新潟に入りました。新潟市西区の西総合スポーツセンターに着いたのは十八日の午後三時ごろでした。私たちは縁もゆかりもない新潟に、一人の知り合いもなく来たんです。

妙光寺での東日本大震災犠牲者追悼法要

Q 避難所生活は、大変だったでしょうね。

光明 西スポーツセンターも次第に人が増えて、多いときは五百人以上になりました。原発避難の場合は地震などと違って、避難地域の人は1人残らず避難して来ます。その中には介護が必要な人や色々な人がいるわけで、集団生活ですから様々なことはありました。ただ避難所にいれば支援物資が届きますから、温かい味噌汁とお弁当も出ます。そこにいる人は大丈夫なんです。ボランティアをはじめ、新潟の皆さんにはよくしていただきました。

利恵子 ただ、私は避難所で肺炎になってしまったんですよ。保健師さんが来てくれていたんですけど、やはり子どもや高齢の方が優先でしょ。具合が悪いけどまだ大丈夫と我慢していたら肺炎になって、もう少しで危なかったと言われました。

光明 そんなこともあって、夏になる前に近くのアパートに移りました。今もそのアパートで2人暮らしです。

Q 楢葉町のお宅は、今はどうなっているんですか？

利恵子 実は、つい先日取り壊して解体確認に行ってきたところなんです。納屋は以前に壊したんですけど、母屋を解体したので…母屋となると、感じが全然違いましたね。（壊した母屋の写真を見せていただく。庭の桃の木が花盛りである。）海まで直線距離で500mくらいで、台所の窓の正面にある竹林から朝日が昇る家でした。

光明 私たちの家は、楢葉町の中でも富岡町に近い側なので第二原発から1㎞地点です。避難解除になっても、昼間は除染作業のダンプカーだらけですし、作業員がいない日曜はスーパーも閉店です。

利恵子 うちの畑は〝反転耕〟したんです。水田は表土を取りましたよね。畑の場合は汚染された土とその下の土をかき混ぜるんですよ。

光明 環境省に表土だけ取ってくださいと頼んだんですが、「汚染土が大量になるから駄目だし、お宅だけ特別にはできない」と言われてしまって。だから畑はもう使えません。

利恵子 それに私たちの家は、南側に畑があって、他の三方は防風林の杉林に囲まれているんです。そのために放射線量も高くて、何万ベクレルです。杉の木の下は除染してもらいましたが上はそのままですから、放射性物質が落ちてきます。それで住まない方がいい、子どもは立ち入り禁止と言われてしまいました。

光明 私たちは強制避難でしたが、帰る時は各自の判断と言われます。本当に理不尽だと思います。でも、私たちはこの国で生きていかなくちゃならないのでね。何気なく平穏に暮らしていることが、奇跡のようなことだと再認識しました。裕福でなくても平穏に暮らしているということが、一番幸せなんですよ。

Q 妙光寺においでになったきっかけは？

利恵子 本当に偶然です。新潟に来てすぐ、まだ避難所にいたころにドライブに来て、そこの国道から看板を見て「なんだろうね、ここ」と入ってみたんです。そうしたら素敵な自然いっぱいの境内で…。いつ来てもオープンで、本堂前のベンチにはコーヒーとお菓子があって「ご自由にどうぞ」とあるし、こんなところがあるんだろうかと思いました。

光明 開放的なお寺で、宗派を問わないということに本当に感激しました。庭の管理をしている方も、浪江町から避難した方だと聞きましたし。

利恵子 自宅のお墓参りもできないし、心の落ち着くところ――手を合わせる場所がほしいと思っていたんです。それ以来、毎月一日と十五日にお参りに来ています。

光明 それで震災の翌年の三月十一日に、避難している高齢者のグループで慰霊祭をやろうとなった時、妙光寺しかないと思ったんです。ご住職に相談して、その年から今春まで毎年慰霊祭をしてきました。

利恵子 夏の〝送り盆〟にも毎年来ています。毎年違う行事があって、いつも楽しんでいます。最初の年のサムルノリ（韓国の伝統芸能）は素晴らしくて感激しました。

光明 岩屋のコンサートも楽しかったし、蓮の花づくりもやりました。それに販売されている茄子漬が、とっても美味しくて…。

利恵子 こちらの総代さん夫婦が、〝送り盆〟に合わせて十全茄子を植えて漬けていると聞いて、びっくりしました。とにかく皮が柔らかくて、妙光寺の〝送り盆〟以外では手に入らない茄子漬です。あの茄子漬を食べられたのは、新潟に来て良かったことの一つです。

Q 新潟の生活はいかがですか？こちらでも農業をなさっているとか？

光明 畑を紹介してくれる方がいて、百五十坪の畑を4ケ所借りています。〝うつくしまクラブ〟という避難している親子を励ます会で、芋掘り等のイベントをしているんです。百人以上集まります。今度はいちご狩りを計画しています。こうして新潟にご縁ができたので、生きている限り元気にやっていこうと思っています。

利恵子 避難直後の肺炎で、私は考えが変わりました。やりたいことは、できる限り先延ばしせずにやろう、と思うようになりました。角田山にも幾度か登りました。素敵な山ですね。角田山のふもとにあることも、妙光寺の魅力です。

貴重なお話を、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

（聴いた人　編集部・新倉理恵子）

寺のうごき 春

春の彼岸会 3月20日㊗

青空のもと、墓地に供養のお経とうちわ太鼓の音が響きます。

お参りに来られた方たちのために、台所では手作りのお斎を準備中。

御妙判お大会 4月29日㊗

今年は小川英爾住職が執り行う、最後のご判様。その読経が新緑の境内に響きわたりました。

雅楽を先頭に、稚児行列が続きます。10名のお稚児さんが本堂の法要で仏様にお花を供えました。

100日の荒行を終えた修行僧による水行は、見ている方も身が引き締まります。

お茶クラブのお点前に、男性当番さんたちもホッとひと息。

当日の台所を支えた女性たち!その労をねぎらう住職と笑顔の記念撮影。

一日研修会 6月18日㊐

今回は研修11回目から、初回の方まで15名が参加し、お経練習や写経等で一日過ごしました。昼食は『イタリアン精進』で皆さんに大好評でした。

ボランテラ
『万灯のあかり～妙光寺の送り盆～』に向けて

境内に飾る大きな蓮飾りと灯籠をみんなで制作中!

浄土化事業報告

客殿土間の石貼りと、床板張り替え工事完了

穴があいて凸凹だった玄関土間と、湿気で抜け落ちそうになっていた廊下を直して、快適になりました。

竹の植栽

講堂から見える庭が竹林になりました。丸窓からの景色も一枚の絵のようです。

浄土講座スタート！

三人の講師による連続講座を開催。回を追うごとに受講者が増え、３回目には講堂の廊下にまで人があふれました。「生と老い死」についてが楽しく語られ、どの回も終始会場は笑いにつつまれました。

第１回 ４月15日

『ピンピンコロリ その前に』

講師：小谷みどりさん

日頃から「自分がどうしたいのか」を決める癖をつけることが大切。―まずは「夕食に何を食べたい？」と聞かれて「なんでもいい」と言ってはいけないとのこと。

第２回 ５月20日

『医師が語る地域医療の現場』

講師：安達哲夫さん

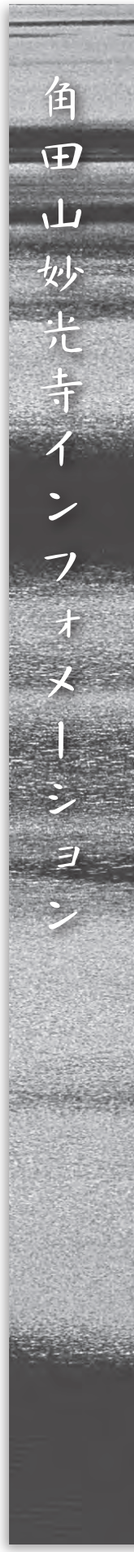
「死は細胞の寿命である」「介護の必要な病気…男性の1位は脳梗塞、女性の1位は認知症」。でも筋肉は90歳になっても増える。頑張りましょう！

第３回 ６月４日

『自分らしい生き方と逝き方』

講師：玉置妙憂さん

人は誰もが「心の中の箱」を持っている。極限の経験をしたとき、その箱が開く。そこで出会うものを「スピリチュアル・ペイン（霊的な痛み）」という。仲間をもち、人生の問いに向き合うことが大切。



お盆参り

妙光寺は、8月1日がお盆のお墓参りです。詳しい日程は別紙ご案内のとおりです。新盆の方へのご案内と、遠隔地の棚経（お盆のお仏壇参り）の日程は直接お知らせします。檀徒でなくお知らせのない方の新盆法要もお受けしますので、ご相談ください。

年会費お願いします

年会費のご案内を郵送の方には同封で、その他の方には地区の役員さんが直接お届けします。郵送の方で〝銀行口座引落し〟お申込みの方は書式が新しくなりました。確認のためにもご返信をお願いします。送金の方もそれぞれの期日までにお願いします。

年会費の前納を希望される方がありますが、口座引落しならその心配がありません。今後とも随時受付しています。また経済的に大変という方、ご相談ください。

法灯継承式

11月18日の住職交代『法灯継承式』はおかげさまで本堂150名、ホテル『泉慶』430名のお申込みをいただきました。委員会事務局で部屋割り、送迎バス配車等の準備作業が進行中です。詳細は10月に直接ご案内します。参加費他は、早くて恐縮ですが受付を開始いたします。間違いを避けるためです。参加する方で、今回ご案内が届いていない方はお知らせください。

これから参加申込みご希望の方は早めにご相談ください。

定例役員会議

定例の檀信徒役員会議を7月1日に行います。妙光寺のすべての運営収支決算・予算案と法灯継承式が主な議題です。会計事務所変更で、例年よりやや遅い開催となりました。

浄土化計画

〝この世に浄土を〟を目的にした浄土化計画ですが、浄土基金へのご寄附も引き続き頂戴しています。引続きのご協力お願いを申し上げます。

前号でご報告できなかった玄関と土間の石張り、講堂外部の竹林造成が完成してご好評いただいています。浄土講座も新潟日報の告知効果もあり、幅広い熱心な参加者で3回とも満席でした。今後も随時計画します。

『安穏廟』現況

わずかですが残り区画があります。お知り合い等でご希望の方はお急ぎください。

秋の行事予告

10月1日㈰、オペラコンサートを本堂で催します。2009年写真家・天野尚さんの写真展とコンサートが、県内で行われ好評でしたが、これは同年5月の妙光寺が初演でした。今年の天野尚さん3回忌を機に、関係者と遺族のご協力で再現します。歌手はイタリアのニコラ・ロッシ・ジョルダーノ他。次号で詳細をご案内いたします。

秋の行事予告

11月30日まで期間限定で、内野駅から運行されている区民バス『シーサイドエクスプレス』ですが、一部時刻が変りました。新しい時刻表を入れましたので今後はそちらをご覧ください。

なお、現在は実験運行ですが、一日の乗車人数があと7～8人増えれば正式運行になるそうです。増えなければ残念ながら運行は中止です。皆さん是非ご利用ください。

誌上法話

小川英爾

〝ごちゃまぜ〟の教え

「同じ大地に根をはやし、同じ雨にうるおされたといっても、
草木にはそれぞれ違いがある」

『法華経・薬草喩品第五』正木晃訳

〝ごちゃまぜ〟の実践

石川県のある社会福祉法人が新しい地域作りのあり方として注目されています。現在金沢市、小松市、白山市等で活動する『佛子園』と言い日蓮宗のお寺が母体となっています。

特徴はいろいろありますが、住民なら無料の温泉と居酒屋がその中心です。そこでは知的障がい者や、併設する「サービス付高齢者住宅」に住むお年寄りが、いきいきと働いている姿が見られます。

また近くの大学に通う学生の住まいや高齢者のデイサービス、学童保育所。さらにはプールも備えたフィットネスクラブに診療所、花や日常雑貨の売店、地域住民がマイカップを預ける無料談話室等々を擁した地域の核となる施設として根付いていました。

職員はもとより集まる人たちが、老若男女障がいの有無も分け隔てなく混じりあっているのです。雄谷（おおや）理事長（55才）は「いろんな人がごちゃまぜに暮らす街です」と明るく語ってくださいました。

初まりはお寺の福祉活動

当初は、日蓮宗行善寺が始めた戦災孤児の収容施設でした。その後1960年に知的障がい児を含めた社会福祉法人となり、住職が宗教誌を販売して子どもたちを引き受けてきました。住職の孫に生まれた雄谷さんは、両親が施設で365日24時間働きづめだったので、小学校中学年まで10人部屋で障がい児たちと一緒にごちゃまぜで育ったそうです。

やがてそこで一緒に暮らした仲間の子どもたちが学校に行けず、社会でも受け入れてもらえない現実を知りました。そしてみんなが一緒に生きられる、地域も巻き込んだ施設のある街づくりをめざすことにしたそうです。

『法華経』の教え

日蓮宗僧侶で住職でもある雄谷さんは、依頼されて元他宗派のお寺を改造した施設のひとつに『三草二木』と名付けました。冒頭の『法華経・薬草喩品第五』が由来だと語ります。この教えは薬草に大中小（三草）、木に大小（二木）の違いはあっても、雨の恵みは平等に受けて薬草に育つ。同じく人に能力・素質の違いはあっても、等しく仏様の教えを受けることで悟りを得て、誰もが世の中を救う人になることをいいます。

それを〝ごちゃまぜ〟と易しく言い換えて「障害をもって生まれた子、何の障害もない子、子どもからお年寄り、元気な人、病気の人など、世の中にはいろんな人がいる。だから面白くて魅力的なものになる。それぞれ存在しているだけで価値があり、みんなで一緒に同じ場所に生きているということ自体に意味がある。そういう場でありたいという願いを込めた」のだそうです。

現地を見学して居酒屋でお酒を交わしながらお話を伺い、お経は読むだけでなく実践してこそ意味があるのだと改めて痛感しました。

教えて お上人

質問 「お盆」とは、どんな意味のある行事ですか？

仏教では正式には「盂蘭盆会（うらぼんえ）」と言います。起源には諸説ありますが、古いイランの言葉で「死者の霊魂」を意味する「ウルバン」が、語源のようです。またインドでは、雨期の間の修行を終えた僧侶に、信者が食事を施していました。このウルバンを祀るお祭りと、僧侶への供養が、古代中国で結びつき、さらに日本古来の祖霊信仰と融合して、現代に続くお盆の行事となっていったのでしょう。

お盆には「施餓鬼（せがき）」の法要も行われます。飢えや乾きに苦しむ餓鬼に、水や食べ物を施すことが功徳となり、廻り廻って、先祖や自分自身の供養になるため、この時期に行われることが多いのです。お盆には、ご先祖様を供養するのはもちろんですが、全ての精霊、死者の霊魂を供養することが大切なのです。

良恵（りょうけい）の修行日記

第10回 昔の写真を見ながら

気がつけば、11月の継承式まで間もなくです。準備のため、昔の妙光寺の写真を整理しました。最近はお寺の行事の時も、デジタルカメラで撮影をすることが多いのですが、フィルムカメラの時代の焼かれた写真も良いものですね。本堂の落慶式や、毎年の送り盆、さらには現住職の入寺式、先代の頃の御判様等々、賑やかな境内の様子に、こうして大勢の人がいたからこそ、妙光寺は七百年続いてきたのだと実感しました。皆で顔を突き合わせて、これはいつの写真だと話していると、知らない話も沢山あって、歴史の面白みを感じます。

1枚の白黒写真に、子どもの頃の私が写っていました。「こんな写真いつ撮ったの？」と母に聞いたところ、「その写真は、父さんでしょ」との答え。自分でも間違えてしまうくらい似ているのは嬉しいような、悲しいような。でも、この顔も先祖代々受け継いできた賜物でしょうか。

寺庭から 小川なぎさ

「さようなら〝もんた〟さん」

口座引き落としへのご協力ありがとうございます

春から会費納入について、銀行口座引き落としのお願いをしてまいりましたが、多くの方にご協力いただきありがとうございました。新しいことをはじめるには準備も大変ですが、幸い信頼出来るアルバイトの女性の方をお願い出来て、着々と進んでいます。

以前から会費のまとめ払いはできませんか？ との問い合わせもありますが、この方法だと万が一忘れていても、長期の入院をされても、納入が出来るようになります。今後も受付をしていますので、今からでも口座引き落としをご希望の方はお寺までご連絡下さい。もし自分で記入するのがたいへんな方は、お寺においでいただければ、一緒に書類を書くお手伝いをします。

これまでのお盆塔婆、送り盆のメッセージは同封の申込書でお申し込み下さい。これも会費と一緒に引き落としになりますので、よろしくお願いいたします。

8月の送り盆、11月の法灯継承式に向けての準備でスタッフ、役員の方々が力を尽くして下さっています。新しく始まった『浄土講座』も好評のうちに3回が終わりました。この『浄土講座』は浄土基金をもとにした、新しい取り組みです。「この世の浄土」を目指して。これからも地道な取り組みを続けましょう。個人的な感想ですが、いろいろなイベントがある中で、この講座はもっともお寺にふさわしいものかもしれません。次が待ち遠しいし、引き続き浄土基金にもご協力をいただけたら嬉しいです。

もんたとの別れ

さて、たかが犬の話で恐縮ですが、犬のもんたが初夏のある朝死んでしまいました。桜の咲くまで頑張り、そろそろだよと県外に住む娘たちに連絡し、全員が帰省、そして戻ったその日のことでした。不思議な最期でした。これまでのペットは近くの山に埋めていましたが、大きくて穴を掘ることが出来ないので、火葬にしました。

リョウケイさんにお経を読んでもらったのですが、涙で時々お経がとまるので、私も一緒に唱えました。犬の弔いでわかったことは、避けられない別れの悲しみから立ち直るのは一連の、人間なら葬式という儀式、そして宗教の力だということでした。もんたはお骨になって仏壇の前に居ます。「次に家族全員がそろったら供養をして納骨だね！太鼓をたたいて賑やかにね」と言ってます。14年間ありがとうございました。お寺が犬の毛だらけでご迷惑をおかけしたことお許し下さい。

暑い夏がやってきます。お寺もあわただしい季節ですが、お盆の提灯や蓮の花、故人をしのび、気持ちをおだやかにする仕掛けのようなものがたくさん準備されます。お参りにお出かけ下さい。